

中村克哉を代表とする上記研究において、ニホンザル・タヌキ・キツネの研究を行ない、農林業との関係および生態学的管理方法の考究を行なった。またアカネズミ・ヒメネズミについて同様な研究の準備を行なった。

IXth International Congress of Anthropological and Ethnological Sciences, Chicago (1973).

論 文

- 1) Kawamura, S. (1973): Adaptation of Japanese large mammals to secondary forest. Proc. East Asian Regional Sem., Japan. Nat. Commit. IBP pp. 57-70.
- 2) Kawamura, S. (1973): The present situation of Japanese monkeys in their natural habitat. Proc. ICLA Asian Pacific Meet. Lab. Anim. Experim. Ani., vol. 22, suppl. pp. 453-459.
- 3) Kawai, M. and U. Mito (1973): Quantitative study of activity patterns and postures of Formosan monkeys by the radio-telemetrical technique. *Primates* 14: 179-194.

報告その他

- 1) 川村俊蔵(1973): 紀伊半島東部における哺乳類の分布について。野生獣類の保護と農林業への被害防止の基礎的研究, 昭和48年度研究報告 pp. 16-19。
- 2) 東滋(1974): 都井岬群における順位形成と群れおち。オスの生活史—ニホンザル地域個体群の研究 I (和田一雄・東滋・杉山幸丸編) pp. 12-21。霊長類研究所。
- 3) 東滋(1973): 御岳山地域の哺乳動物。自然環境保全地域候補地学術調査報告書, 御岳・能郷白山 pp. 21-30。岐阜県。

学 会 発 表

- 1) 森林植生の変化とニホンザル分布の歴史の変動
東 滋
哺乳類研究グループ研究会シンポジウム「哺乳類と自然保護」(1973)
- 2) 下北半島のニホンザルの生活と行動
東 滋
日本動物心理学会第33回大会シンポジウム (1973)
- 3) Origin of hominid huntings - from the perspective of primatology.

¹⁾ 研修員

²⁾ 研修員

変異研究部門

野沢 謙・江原昭善・和田一雄
西邨顕達・庄武孝義

研究概要

1) ニホンザル集団の構造に関する数理的研究

野 沢 謙

ニホンザルにはその社会構造の単位として群れの存在が確認されている。群れの遺伝学的有効サイズ、群れ間の移出入率などは、ニホンザル集団の遺伝学的構造と動態を支配する重要なパラメーターである。従来から蓄積しているニホンザルの社会、生態学的知見を利用して、これまでにニホンザルの遺伝学的有効サイズを推定してきたが、2)のテーマとも密接な関係があるので、これと関連させて次のパラメーターを推定すべく目下資料収集中である。

2) サルの蛋白多型現象の探索と遺伝的変異性の定量化

野 沢 謙・庄武孝義

遺伝的多型現象の存在を明らかにし、その頻度分布をもとにして、ニホンザルの集団の構造と動態を統計学的に解明せんとするもので、昨年度までにニホンザル35群約1,300頭分の資料を収集し、群ごとの遺伝子構成を明らかにして群間の遺伝的距離と地理的距離の関係からニホンザルの移動距離について考察した。また他の *Macaca* 属のサルについて種ごとの遺伝子構成を明らかにし、種間の遺伝的関係を明らかにすべく研究を開始した。これについては1974年度の日本遺伝学会で第一報が発表されるはずである。

3) ニホンザルの先天的四肢奇型への遺伝学的アプローチ

野 沢 謙・庄武孝義

ニホンザルの高崎山、臥牛山、淡路島などの群に多発する四肢奇型が遺伝的支配を受けているか否かを明らかにすべく研究が続行されている。これまでは集団の奇型出現に関するセンサスから統計遺伝学的方法をもちいて分析を行ってきたが、今年度は淡路島野猿公苑の協力を得、交配実験を開始した。

4) 家畜化現象の集団遺伝学的研究

野 沢 謙・庄武孝義

在来諸家畜とそれらの野生原種の遺伝学的野外調査、および家畜と野生原種の遺伝的交流に関する調査によつ

て、家畜化現象そのものの実態を集団遺伝学的に解明すべく研究が続行されている。この目的のために1974年秋に東京大学の文部省科研費による海外学術調査の隊員として庄武がマレーシア連邦に出張する予定である。

5) 霊長類各分類群の頭骨諸形質の形態学的研究

江原 昭 善

1. 年報 vol. 3記載の狭鼻猿各分類群の顎骨発達様式の研究は完了。
2. 現在、頭部支持機構に関する形態学的分析を行ないつつある。
3. 1973年度冬学期キール大学理学部人類学教室に客員教授として赴任、当教室の冬学期中心講義である人類系統論を担当。

6) 志賀高原におけるニホンザルの冬期の遊動

和田 一 雄

志賀高原地獄谷B₂群について冬期の泊り場の特性、1日の移動距離、食物になる樹種とその利用頻度、遊動域内における土地利用を刻明に追跡、調査した。同C群では4頭捕獲してイレズミし、体重、体長など生体計測をして再びはなした。全頭数について同様の調査を行ない、四季による体重変化を調査する。又上信越山岳地域の広域調査の一環として雑魚川、魚野川の分布調査を行ない、4群の存在を確認した。

7) クマオンヒマラヤ西部のアカゲザルの生態

和田 一 雄

シムラ周辺のアカゲザルの秋・冬における遊動様式を気象・食物との関係の中で分析した。

8) 高崎山生息ニホンザルの行動と個体群動態

西 邨 顕 達

行動研究については現地調査を1回やったのみでもっばらここ数年とってきたデータの整理を行なった。個体群動態については、生活史部門の杉山幸丸氏、大沢秀行氏および共同研究員増井憲一氏と共同でセンサスを行なった。

9) アマゾン上流域における広鼻猿類の社会生態学的研究

西 邨 顕 達

1973年10月から翌年3月にかけて日本モンキーセンター南米調査隊に加わり、コロンビア国、カケタ河の支流ベネジャ川流域で、9属10種のサルの調査を行ない、とくにウーリーモンキーについてかなりの知見を得た。霊長類のなかで社会生態学的な情報の著るしく不足している広鼻猿類の調査は今後も続ける予定である。

論 文

- 1) Ishimoto, G., M. Kuwata and T. Shotake (1974): Polymorphism of red cell NADP-dependent isocitrate dehydrogenase in macaque monkeys. *J. anthrop. Soc. Nippon* 82:52-58.
- 2) Ehara, A. (1974): Methodisches zum Prognathie-Problem beim morphologischen Vergleich von Primatenschädeln. *Z. Morph. Anthrop.* 66 (1): 83-94.
- 3) Nishimura, A. (1973): The third fission of Japanese monkey group at Takasakiyama. In *Behavioral Regulators of Behavior in Primates*. (Carpenter, C.R. ed.) pp. 115-123. Associated Univ. Press.
- 4) Masui, K., A. Nishimura, H. Ohsawa and Y. Sugiyama. (1973): Population study of Japanese monkeys at Takasakiyama. *J. anthrop. Soc. Nippon* 81 (4):236-248.
- 5) Nishimura, A. (1973): Age changes of the vocalization in free-ranging Japanese monkeys. *Symp. IVth Int. Congr. Primat.* 1:76-87. Karger, Basel.
- 6) Itani, J., and A. Nishimura (1973): The study of infrahuman culture in Japan. A review. *Symp. IVth Int. Congr. Primat.* 1:26-50. Karger, Basel.

報告その他

- 1) 野沢謙・庄武孝義(1974): ニホンザルにおける群内および群間の遺伝変異。オスの生活史—ニホンザル地域個体群の研究Ⅰ(和田一雄・東滋・杉山幸丸編) pp. 63-69. 霊長類研究所。
- 2) 和田一雄(1973): ヒマラヤ山麓のアカゲザル。モンキー17(3・4): 6-13。
- 3) 西邨顕達(1973): 高崎山自然群で観察されたニホンザルの母—子関係。霊長類研究所共同利用研究会「行動観察の基本的な方法と記述の客観化」報告集 pp. 43-56. 霊長類研究所。
- 4) 西邨顕達(1974): ウーリーモンキーを追って。モンキー18(1): 16-23。
- 5) 増井憲一・杉山幸丸・西邨顕達・大沢秀行(1974): 高崎山生息ニホンザルの生命表(予報)。オスの生活史—ニホンザル地域個体群の研究Ⅰ(和田一雄・東滋・杉山幸丸編) pp. 47-54. 霊長類研究所。

学 会 発 表

- 1) ニホンザルの遺伝的変異性 I. 群内変異
庄武孝義・大倉よし子
田名部雄一・野沢 謙
第45回日本遺伝学会(1973)

- 2) ニホンザルの遺伝的変異性 II. 群間変異
野沢 謙・庄武孝義
第45回日本遺伝学会 (1973)
- 3) ニホンザルにおいて群特異的に見られる Adenylate kinase (AK) および Esterase A₁ (EsA₁) 座位の多型現象について
庄武孝義・大介よし子
北島正子・野沢 謙
第27回日本人類学会日本民族学会連合大会 (1973)
- 4) PGM₂ 2-2 遺伝子型の固定から推察されるヤクザルの創始者集団の小ささ
庄武孝義・大介よし子・野沢 謙
第18回プリマーテス研究会 (1974)
- 5) ニホンザルの群間遺伝的変異
野沢謙・庄武孝義・大介よし子
第18回プリマーテス研究会 (1974)
- 6) Entwicklung der Hominiden
Akiyoshi Ehara
ドイツ地質学会例会 (1974)
- 7) クマオンヒマラヤ西部のアカゲザルの生態
和田 一 雄
第18回プリマーテス研究会 (1974)

生活史研究部門

杉山幸丸・小山直樹
田中二郎・大沢秀行

研究概要

- 1) ニホンザルの個体群生態学的研究
杉山幸丸・小山直樹・大沢秀行
- 2) インド亜大陸を中心とする狭鼻猿の動物地理学的研究
杉山幸丸・小山直樹・大沢秀行
- 1), 2)については年報第3巻8頁参照。
- 3) エチオピア高原におけるゲラダヒヒの社会生態学的研究¹⁾

大 沢 秀 行

昭和48年5月より49年3月まで、エチオピアにおいて表記の調査を行なった(海外との交流の項参照)。4名の共同調査であるが、大沢秀行の分担はとくに、ゲラダヒヒの population ecology を中心にしたものである。social unit の個体数変動およびその要因解析, grouping の dynamics の解析などから、群れの構造の究明へアプロ

¹⁾ 河合雅雄・森 梅代 (以上社会研究部門), 岩本俊孝 (九大・理) との共同研究。

ーチを進め、さらにはこの社会構造と個体数制限機構との関係を追求してゆく。個体数変動・社会変動の研究には長期の調査が必要であり、今後の調査を計画中である。

4) 狩猟採集民, 漁撈民の生態人類学的研究

田 中 二 郎

1. 現存狩猟採集民を対象に、生態学的研究を行なっている (年報 vol. 3, p. 8 参照)。日本南海域における漁撈民, アフリカ, コンゴ森林のピグミー等をブッシュマンとの対比において研究しつつある。
2. 野生チンパンジーの社会・生態, アフリカの遊牧民の生態を研究し, 狩猟・採集・漁撈民との比較的な視点から, ホミニゼーションの過程における, 生活様式, 社会の復元を試みようとする。

総 説

- 1) Sugiyama, Y. (1973): The social structure of wild chimpanzees—A review of field studies. In *Comparative Ecology and Behaviour of Primates*. (Michael, R. P. & J. H. Crook ed.) pp. 375-410. Academic Press, London.
- 2) 杉山幸丸(1973): 動物の社会。新しい生物学史—現代生物学の展開と背景 (沼田真編) pp. 171-183。地人書館, 東京。
- 3) 小山直樹(1974): 嵐山群の分裂—その仕組みと血縁関係。アニマ 2: 31-36。
- 4) 田中二郎(1973): 採集狩猟民における集団の生態。からだの科学 52: 111-115。

論 文

- 1) Sugiyama, Y. (1973): Social organization of wild chimpanzees. In *Behavioral Regulators of Behavior in Primates*. (Carpenter, C. R. ed.) pp. 68-80. Bucknell Univ. Press, Lewisburg.
- 2) 杉山幸丸・大沢秀行(1974): 鈴鹿山系霊仙山生息のニホンザルの個体群動態。I 概観。日生態誌24: 50-59。
- 3) Koyama, N. (1973): Dominance, grooming, and clasped-sleeping relationships among bonnet monkeys in India. *Primates* 14: 225-244.
- 4) 田中二郎(1974): ブッシュマンの生態。生態学講座 25「人類の生態」pp. 61-91。共立出版, 東京。

報告その他

- 1) 杉山幸丸・大沢秀行(1974): 霊仙山生息ニホンザルの個体群動態。オスの生活史—ニホンザル地域個体群の研究 I (和田一雄・東滋・杉山幸丸編) pp. 55-